

オーガスタ・ウェブスターとギリシア神話の「悪女」たち

兼武 道子

オーガスタ・ウェブスター (Augusta Webster, 1837-1894) は、“Circe”と“Medea in Athens”を収録した詩集 *Portraits* (1870)を発表するまでに、すでに 4 冊の詩の本と 1 冊の小説のほか、アイスキュロス(Aeschylus)の *Prometheus Bound* (1866)と、エウリピデス(Euripides)の *Medea* (1868)の翻訳を出版していた。古典ギリシア語は長らく男性の学問領域と考えられていたので、女性による翻訳は好奇心をもって受け止められたが、批評家からの評価は高く、次作となる *Portraits* も関心を集めて、概ね好意的に読まれた。ウェブスターはその後も詩集や戯曲、評論や書評などの執筆を行いながら、女性にまつわる社会問題に関する活動も行い、当時はある程度の知名度があったらしい。しかし、彼女の主要な作品は社会的な関心を示すものが多かったこともあり、その後の文学思潮の変遷の中で忘れられていった。ようやく没後 100 年ほど経った 1990 年代に、フェミニスト系の批評家たちによって詩や評論集 *A Housewife's Opinions* (1879)の持つ現代的な意義が再発見され、現在はヴィクトリア時代の主要な女性文学者のひとりとして作品の再評価が進みつつある。

詩集 *Portraits* には、男女の語り手による劇的独白が収められている。語り手の大半はヴィクトリア時代の人物たちで、人物の設定は典型的である。いずれの語り手も、特定の職業や社会階層の代表として、ウェブスターの社会批評を代弁する役割を果たす。“Circe”と“Medea in Athens”は、その語り手が具体的な個人として特定される点で例外的だ。しかも彼女たちはいずれも強烈な個性を持つことで知られた人物でもある。ウェブスターはこれらのふたつの作品において、複雑な個性を描きつつ、彼女たちに古代ギリシアという時代と場所を超えて、19 世紀のイギリス社会に対する批評性を持たせるという課題に取り組んだといえるだろう。

なぜキルケーとメデューサをウェブスターは語り手として選んだのだろうか。従来の研究では、古代の枠組み ヘテロセクシュアル・ポリティクス を借りることで、19 世紀当時の女性たちが表明することのできなかつた欲望や異性愛の力関係への批判を言語化したといわれてきた。(Sutphin ed. 17, Fiske 478) 正しい指摘だと思うが、いくつかの疑問も残る。例えば、古代ギリシアの舞台設定は、ヴィクトリア時代の社会を安全に批判するための偽装としての役割しか果たさないのだろうか。また、ギリシア神話には個性的な女性たちが数多くいる中で、なぜキルケーとメデューサが選ばれたのだろうか。このふたつを描くことは、ヴィクトリア時代の性の文化について何を明らかにするのだろうか。

これらの問いに対するひとつの答えとして、キルケーとメデューサは、オリュンポス神話が成立する以前の地母神信仰の系譜に属する女性たちであることに注目したい。前ギリシア的と呼ばれる文化の「大地的構造を持つ女神」たちは、北方から入ってきたインド・ヨーロッパ語系民族の男性神を頂点とする神話体系に「宗教的であると同時に政治的」なプロセスによって組み込まれてゆき、ゼウスたちの配偶者や姉妹や娘としての属性を与えられて従来の地位を奪われ、周辺的存在として父権秩序に統合された。(エリアーデ 113, 若桑 41, 70) 古代の地母神たちは、生命の誕生と死、大地の豊穡、本草学的な知識を司り、獣たちの保護者として

ポトニア・テローン

「動物の女主人」と呼ばれる姿で表されることがあった。キルケーもそのひとりだ。魔法の島に住み、難破した船乗りを毒薬を飲ませて動物に変え、彼らを身のまわりに侍らせる彼女は「動物の女主人」としてのかつての地母神を彷彿とさせる。また、メデューサは、地母神だった女神ヘカテに仕える、自身も神の子孫である巫女であり、魔術と薬草の扱いに長けた女性である。『アルゴナウティカ』では、獣たちが喜んでメデューサに寄り添う様子が描かれていて、彼女が動物の女主人であることが窺える。

このように、キルケーとメデューサを有史以前の母系社会の存在として考えると、彼女たちが魔物や怪物的な悪女とみなされたのは、オデュッセウスとイアソンという男性「英雄」たちの価値観に対立し、彼らの支配を阻むものだったからということが分かる。動物の女主人キルケーは、オデュッセウスという典型的な家父長によって魔物として征服され、邪悪な魔術の力を無害化され平定されたことになる。メデューサとイアソンの間の葛藤は、母系の力と、家父長制による支配の確立を目論むイアソンの間に展開された争いということになる。キルケーとメデューサの視点に立つことは、とりもなおさず、男性中心主義的な価値観に基づくギリシア神話の形成と受容の歴史を、集約的な形で問い直して相対化する営みだといえる。

さらにウェブスターの描くキルケーとメデューサは、19 世紀に生きる女性たちでもある。ウェブスターのキルケーは、オデュッセウスと出会う前の彼女であり、詩は『オデュッセイア』の前日譚である。“Medea in Athens”

はイアソンとの葛藤の後であり、エウリピデスの悲劇の後日譚である。有名なエピソードから彼女たちを意図的にずらして描くことによって、ヴィクトリア時代に強い影響力を持ったふたつの女性像を彼女たちは体現できるようになる。キルケーは、デニソン(Alfred Tennyson)が“The Lady of Shalott”や“Mariana”で描いた、閉鎖空間に囚われて男性による救出を待つ乙女の姿に重なる。アテネ王の妃となり、子供を産んで、自分が「幸せな妻」 (“[a] happy wife” [240, 242])として安泰であることを強調するメディアは、「家庭の天使」を想起させる。しかしもちろん、キルケーもメディアも、これらの類型には決して収まらない存在である。ウェブスターの描く彼女たちは、ヴィクトリア時代の社会が女性に関して作り上げた偶像への挑戦になっているといえる。

“Circe”について

ウェブスターのキルケーは、『オデュッセイア』の設定を活かしつつ、ヴィクトリア時代の中産階級の女性として造形されている。美しい絶海の孤島で際限なく繰り返される平凡で快適な日常に飽き足らず、“What fate is mine, who, far apart from pains / And fears and turmoils of the cross-grained world” (58-59)と訴える彼女は、保護という名目で家庭的日常に行動範囲を制限され、自立した個人としての知的・精神的発展が不可能な「退化的存在」とみなされ、「無垢の理想化された型」としての子供であることを求められた「十九世紀の最後の三十年間」の女性たち(ダイクストラ 277-313)のひとりである。この閉塞した状況から救い出してくれる男性を自分の「主人」としたいと願う彼女は、閉鎖空間で男性による救出を待つマリアナやシャロット姫と類似した人物である。しかし、鏡に映った映像としてしか外界を見ることを許されず、自身は「見られる」存在でしかないシャロット姫とは異なり、ウェブスターのキルケーは、自らの視線を主体的に動かしてオデュッセウスの船を視界に捉えることで、キルケーとしての本領を発揮し始める。これまでに島に流れついた家父長たちの行動を見てきた彼女は、父権的な家族制度が「家庭の天使」から隠してきた視点を持っている。彼らに“cup of Truth” (172)を差し向けることで本性を露見させる(“Change? there was no change; / Only disguise gone from them unawares” [188-189])キルケーは、数々の作品に描かれてきたような、妖術によって男性を破滅させる魔女や女神でも悪女でさえもなく、“I am a woman, not a god” (65)という発言そのままに、ひとりの女性として、異性愛に内在する非対称性と性のダブル・スタンダードを指摘する。

“Medea in Athens”について

エウリピデスの悲劇に描かれたイアソンとの葛藤を経て、アテネに移動したメディアは、アテネ王アイゲウスとの間に新たな息子たちをもうけ、幸せな家庭を築いている。現在の夫への尊敬と子供への愛を表明する “[a] happy wife” (240, 242)としての彼女は、「家庭の天使」さながらであるが、過去には家を興すというイアソンの野心を子供や関係者の殺害によってくじいたのであり、ヴィクトリア時代の家族イデオロギーにとっては危険な存在である。イアソンに対して完全な勝利を収めたことを“I an envied wife, / And he alone and childless” (153-154)と対照させて表現し、グロテスクな優越感によって自らの幸せを確認するメディアは、実はイアソンに依存しているともいえる。(Fiske 484)つまり、家庭の幸福が、家庭内に収まらない主婦のセクシュアリティによって成り立っているのであり、結婚による家族制度のあり方が疑問に付されているのである。実際に、子供を殺した母親としての自認こそがメディアにとっては何よりも重大なものであり、その意味で、アイゲウスとの現在の結婚ではなく、イアソンとの過去が彼女を決定的に形作っている。家父長としての支配確立を目指したイアソンの野望を阻む地母神メディアというエウリピデスの悲劇における人物造形を継承しつつ、ウェブスターの作品では、現在の家庭に絶対の価値を見出さず、イアソンとアイゲウスによってセクシュアリティを管理されないことによって、メディアは男性優位の家族制度を揺るがせ、父権的なメンタリティを根底から批判する者になっている。

引用文献

Fiske, Shany. “Augusta Webster and the Social History of Myth.” *Women’s Studies* 40 (2011): 469-490.

Sutphin, Christine. “The Representation of Women’s Heterosexual Desire in Augusta Webster’s ‘Circe’ and ‘Medea in Athens.’” *Women’s Writing* 5.3 (1998): 373-393.

Webster, Augusta. *Portraits and Other Poems*. Ed. Christine Sutphin. Ontario: Broadview, 2000.

ミルチア・エリアーデ 『世界宗教史』 2 (下) 松村一男訳、筑摩書房、2000年。

ブラム・ダイクストラ 『倒錯の偶像』 富士川義之ほか訳、パピルス、1994年。

若桑みどり 『象徴としての女性像』 筑摩書房、2000年。